

令和7年度あしたのまち・くらしづくり活動賞 主催者賞受賞

子どもの居場所づくり・体験機会づくり

岩手県宮古市 NPO法人みやっこベース



商店街内にあるコミュニティスペース「みやっこハウス」

2011年3月の東日本大震災により、大きな被害を受けた岩手県宮古市において、「地元の復興に関わりたい」という高校生たちへのサポートをする中、「復興の先の街の

未来を担う若者を育む仕組みをつくりたい」という想いから、2013年2月にみやっこベースを設立しました。2014年には高校生の居場所として「みやっこハウス」を開設し、活動拠点としての充実を図りました。

震災から10年が経過する中で、「宮古市で生まれ育つすべての子ども・若者の人生が豊かであること」を目的に掲げ直し、子ども・若者が「望む未来を自ら創る“力を育むための「居場所」や「体験活動」などの事業を中心に、現在まで12年間活動を続けています。

震災からの復興が大きなテーマであった設立初期では、「高校生サミット」と称したワークショップ形式の対話の場により、高校生が街の現状や未来を考える機会を作り

続けました。毎月1回開催していた高校生サミットは2019年までに合計50回、参加者のべ800人にのぼり、高校生の視点から街を活性化する「商店街MAP作成」「観光ツアー」「高校生カフェ」などの9つのプロジェクトが生まれました。

その後、「子ども・若者」と「地域」に関わり続ける中で見えてきた様々な課題を解決しようと、小学生から若手社会人、未就学児とその保護者へと対象ごとのニーズを踏まえながら活動を展開。それらの取り組みが評価され、地域の課題解決につながる事業を行政と連携しながら実施しており、子ども・若者が「地域で育つ」環境が仕組み化されつつあります。





「みやつこネイチャークラブ」で景勝地・浄土ヶ浜にてシーカヤック体験



みやつこC:LOVE 「はじめまして会」での高校生同士の交流

商店街内のコミュニティスペース「みやつこハウス」では、小中高生や大学生が集い、勉強や雑談、遊びを通じて安心できるつながりを育んでいます。中でも地域活動をしてみたい高校生は「みやつこC:LOVE（クラブ）」のメンバーとして、イベントの企画運営やラジオ番組づくりを行うなど、若者たちが街の中で主体的に活動する文化が根づいてきました。こうした活動を通じた実社会での学びは学校や家庭では得がたく、人前で話すことが苦手だった高校生が堂々とプレゼンできるようになったり、「早く地元を出たい」と言っていた高校生が地元への愛着を深めて将来的なUターンを希望したりと、高校生が自信を得て進路を切り拓くきっかけにもなっています。

また、子どもたちへの体験機会の提供も活動の大きな柱です。都会と比べて教育格差、体験機会の格差が進む中、宮古市特有の自然資源を活用した体験プログラムを提供することにも注力しています。「みやつこファーム」は、年間を通して種まきから収穫・調理までの農作業を体験する機会。「みやつこネイチャークラブ」では森・川・海をフィールドに、年間を通して多様な自然体験を提供。子どもたちはアクティビティを通して自己肯定感や自己効力感、地元への愛着を育んでいます。



こどものまち「みやつこタウン2024」にはのべ263人の小学生が参加

さらに、地域内の事業者・行政・教育機関との連携によって、小学生向けの社会体験イベント「みやつこタウン」や高校生向けの地元探究ツアー「地元修学旅行」など、多世代のリアルな職業・社会体験の場も展開。地域そのものが学びの場となる仕組みづくりに力を入れてきました。

2024年度、みやつこベースは地域に



親子支援事業イベント「女性議員に声を届けよう！子育ておはなし会」で話に花が咲く様子

根ざした活動を通じて、たくさん子ども・若者たちに居場所と体験機会を届けました。みやっこハウスではのべ1804人に居場所を提供し、小学生向けの体験活動にはのべ432人が参加。高校生向けの地域活動支援ではのべ44人をサポートし、高校での出張授業ではのべ104人の生徒に向けてキャリア形成支援の機会を持ちました。

その他、2024年度からは親子支援事業、2025年度からは不登校支援事業など、地域のつながりから聞こえてくるニーズに応えた新規事業の立ち上げも積極的に行っています。現在は年代に応じて11の事業と18のプログラムを展開しており、12年経った今もなお、成長を続けています。

こうした日々の積み重ねの中から、「宮古で育ち、宮古を育てる人になる」循環が形になり始めています。4年制の大学が無く、高校卒業を機に市外へ転出する若者の社会減が続く宮古市において、みやっこベースの活動に参加経験のあるOB・OGのUターンが続々と増えています。市役所職員として市民の暮らしを支えるOGをはじめ、市議会議員として街の未来を創るOG、地域商社を設立したOB、社会福祉の専門家として生活に困難を抱える子どもを支えるOGなど、20人以上のOB・OGがUターンし、宮古で活躍しています。さらに、みやっこベースの現在のスタッフ10名のうち4名は、かつて高校生としてみやっこベースの活動に参加していたOB・OGたち。進学や就職を経て再び地元・宮古に戻り、今度は子どもたちを支える立場として活動を推進しています。

このような若者たちは、みやっこベースの活動で「対話・協働・探究」を経験していることから、地域を自分ごととして捉え、地域の課題や人の思いに寄り添いながらアクションを起こす人材となっています。市民・行政・企業など、多様な立場をつなぐ「ハブ」としても期待される存在になっています。また、帰ってきた若者がまた次の世代にその背中を見せることで、現在の子

もたちのロールモデルになり、子どもたちが未来に希望を持って育つことに繋がっています。みやっこベースでは、このような循環を生み続けています。

震災から14年、団体設立から12年が過ぎた現在、宮古市には少子化や人口の社会減、子どもの貧困や教育格差など多くの課題があります。「居場所」や「体験」の場づくりを継続し、子どもたちの生きる力を育むと同時に、地域の未来を創る若者たちの成長を支援し、活力のある街づくりを続けていきます。

(NPO法人みやっこベース

事務局・広報担当 八島彩香)



設立1年目に活動した高校生の卒業式(2014年3月)。10年の時を経て、この写真に写る高校生13人のうち5人がUターンし、みやっこベースの活動を支援している。